

秀賞

人のために

岩手県矢巾町立矢巾北中学校

2年 山本 昂太郎

「人の命を救いたい」

こう思い始めたのはいつからだったのだろうか。母のお腹にいる間、母が入院し、安静にしていなければならなかったこと、産まれた時、NICUに入ったことを小さい頃から聞かされていたからかもしれないし「昂太郎はたくさんのお医者さんや看護師さんに助けてもらったんだよ」と両親から教えられていたからかもしれない。そんなこともあって僕は今、まだぼんやりとだが、将来は医者になりたいと思っている。しかし、年を重ねていくたびに人の命を預かるということの重大な責任、医師になることの難しさを思い知らされている。

話は遡って1年程前のこと、僕が入っているバスケットボールのクラブチームでの練習の日だった。いつもと変わらず、練習をしていたところ、クラブチームの中の一人が突然倒れてしまったのだ。すぐにコーチが駆け寄り、応急処置を始め、他の大人もできることをすぐ始めていた。必要な水、毛布などを取りに行く人、大勢の人が自分にできることを必死になってやっていた。そんな中、僕は何もすることができなかった。とても怖くて足がすくんでしまっていた。でも心の中ではとても悔しい思いが湧き上がっていた。急に襲いかかってきた非日常の事態に僕は全く無力だった。ドラマで見たことでも、保健体育で学んだわずかな知識だけでも何かできることがあるはずだった。それなのに僕は何もすることができなかった。見ていることしかできなかった。「人は緊急時にこそ、その実力が発揮される」そう痛感し、ショックを受けた。そうこうしているうちにやっと救急車が到着した。待っている時間が僕にはとても長く感じられた。救急隊員の姿を見たとき、僕は心の底から安堵を感じた。いつ何が起こるか分からないし、医療の助けを必要とする人は、自分も含め、身近なところにたくさん存在していると分かった。倒れた人はその後、救急車、救急病院で治療を受け、意識を取り戻した。そして今ではそんなことも忘れさせるぐらい元気にプレーしている。僕はこのような体験をして緊急時に動くことがどれだけ大切か、どれだけ難しいことなのかを身をもって知った。と同時に、医療の大切さ、医師という存在のありがたさを改めて思い知らされた。

最近、世界各国でも日本全国でもコロナウイルスなどの影響による医療の逼迫が問題になっている。また、SDGsの目標の一つ、

「すべての人に健康と福祉を」

これも大きな問題となっており、どこでも誰でも平等に必要な医療を受けられるようにすることを目指している。日本ではどうだろうか。世界から見ても日本は豊かな国、先進国とされている。だが本当に一人一人が必要な医療を受けることができているだろうか。都市部では多くの人が安心して病院に行くことができている。しかし、コロナ禍で、都市部でも救急車でたらい回しにされ、患者が命を落とすというニュースを見かける。ましてや、地方や山間部では病院や医師が不足し、大きな問題になっている。僕はこのような問題をなんとかしたいと思っている。もちろん一人で全て達成することはできないが、同じ志を持った人たちと一緒に、どこでもいつでも誰でも平等な医療を受けられるようなしくみをつくり、一人でも多くの人の笑顔を生み出すことができれば素敵だと思う。両親は「自分の力を人のために使える人になりなさい」と言う。僕が医師になり、一人でも多くの人の命や未来を救うことができれば「人のために力を使う」ことになるのではないかと考えている。

僕には目標としている医師がいる。小学校低学年の頃、夏休みの工作を作っていた時、親指の骨が見える程、深くカッターで切ってしまった。救急で対応してくれた医師は、不安で泣きそうな僕に「頭がよくなる注射を打ってあげるか。」と冗談を言い、心を和ませてくれた。治療に通うのが楽しみになるような面白く、楽しい医師だった。指が痛くてつらかったという思い出とともに優しく頼もしい医師の言葉が今でも心に残っている。僕は、医師という仕事は人の命を救うだけの仕事ではなく、苦しい治療に希望を持たせたり、子どもからお年寄りまで、さまざまな人を笑顔にしたりできる職業なのだと感じた。

もしかするとこの先、僕の将来の夢は変わっていくかもしれない。しかし、僕はどんな職業に就いても「人のために力を使える」人になりたい。そのために今は、目の前にあるたくさんのしなければならぬことにしっかり向き合い、小さなことでも自分にできることは何かを考え、周りにいる家族や友人を笑顔にできるように行動していきたい。そして、将来はもっと多くの人を笑顔にできるような人になっていたらいいなと思っている。